

飢えと絶望が支配していた敗戦後の時、
「虫けら同然」と蔑まれていたバタヤ部落に身を投じて
その一員となり彼らを愛し抜いた、

尊者アリゾト・北原 怜子

(さとこ)

28歳という若さで世を去ってしまった
彼女の生き方・信仰とは！

怜子が放つ重要なメッセージには、現代社会の抱える難題の解決への鍵も含まれるのではないだろうか。他書では無かった詳しい部分や新しい事実にも触れた本書から、より深く「北原怜子」を探っていたきたいと思います。



澤田 愛子

Asko Sawada

言問橋の
星の下で
北原怜子と蟻の街

聖母の騎士社

こんなことが起こるなど、最初、
誰が想像できただろうか。敗戦
後数年しかたつていない荒廃し
た時代だった。新憲法が施行さ
れ、新時代への希望が生まれて
いたものの、社会はささくれ立っ
て犯罪も多発していた。暗黒と
絶望、そして希望の断片も入り
乱れて、社会はまさにカオスの
様相を呈していた。そんな中、
蟻の街という屑に囲まれた部落
からは、一人の若きキリスト者
の女性の献身によって、祈りの
声や聖歌が響き渡り、バタヤが
続々とキリスト教に入信してい
くという現象が生じていたのだ。

(本書・本文より)

ことばし
《言問橋の星の下で》

《北原怜子と蟻の街》

澤田 愛子 著

定価19800円(本体18000円+税)

A5サイズ・カバー巻き・327頁

ISBN978-4-88216-387-9 C0016